

# オーディエンス（聞き手・読み手）としての立場を重視した 英語の自律的相互学習

原田 康也  
早稲田大学法学学術院

## 1. なぜ教室で授業を行うのか？

筆者は 1980 年代半ばより早稲田大学法学部で英語の授業を担当しているが、当初は授業の大部分を LL 教室で実施し、1990 年ごろから一部の（英作文の）授業でコンピュータ教室を利用するようになった。『教科書』ひとつを持って教室に赴く同僚の英語担当教員に対して、また受講生に対して、英語の授業をなぜ LL 教室やコンピュータ教室で（わざわざ）行うのか、理論武装が必要であった。その後、コンピュータ・ネットワークの利用が当たり前となった 1990 年代後半以降は、むしろなぜ授業を（わざわざ）教室で集まって（対面で）進めるのかが問われるようになって来た。本稿では、この問いに対するひとつの回答を示したい。

## 2. 『対話ができる英語』をめざして

早稲田大学法学部では、さまざまな事情からレベル別のクラス分けは実施しておらず、一クラス 30 人弱の中には英語圏の学校で初等・中等教育を過ごして来た学生もいれば、英語が極めて苦手なまま大学に進学してきた学生もあり、たとえば TOEIC スコアで 300 点弱から 900 点以上まで、Versant English Test で 30 点弱から 80 点までの学生が混在している。こうしたさまざまな英語学習経験と到達度の学生に対して、1 年次には paragraph writing から始めて 400 語程度の essay writing の基礎を身に付け、graded readers などを利用して reading fluency の向上を図りつつ、基礎的な語彙が不足している学生には e-learning を活用した自学自習を促し、2 年次の授業でグループ活動に基づいて英語で発表を行い、その内容を複数セッションからなる 2,000 語程度の英文にまとめる活動を無理なく行えるようになるための準備を行っている。

教室に到着した学生は座席配置表に基づいてその日の座席を確認し、PC を起動している間に前回の授業時に借り出した多読用図書を返却し、新たに一冊借り出しエクセルの読書・作文記録を更新してファイルを提出し、宿題として完成・修正してきた 400 語の英文を Word のファイルとプリントアウトで提出する。

作業がひと段落したところで 25 分程度の時間を使用して 3 人一組で応答練習を進める。この応答練習では、担当教員が用意した質問を印刷した名刺大のカードを各グループに 10 枚渡し、3 人のうちの一人がこれを読み上げ、もう一人がこれに回答し、もう一人がタイムキーパーとして進行管理とビデオ撮影を行い、一問回答するごとに相互評価用紙に評点を記入して役割を交代する。応答練習の後 30 分ほどを使って、その日のテーマについて 400 語を目指して文章作成を進める作業に費やす。大部分の受講生にとって 30 分でこれだけの分量の英文を仕上げることは難しく、次の授業までに完成させてファイルとプリントアウト 6 部を用意してくることが宿題となる。新たな話題について応答練習のあと文章を作成した次の週では、前回と同じ 10 枚の質問カードで応答練習を進め、6 人で相互に英文をチェックし、内容についてコメントを記入し採点をする。戻ってきたコメントに基づいて作文を修正し、次の週に提出することが宿題となる。

春学期には、文章作成ないし相互チェックのあと、10 分ほどの短い時間で web 上の CNN のビデオニュースクリップを受講生が自由に選んでいくつか視聴し、興味を持った話題について PowerPoint のスライド 2, 3 枚にまとめ、最後の 5 分ほどの時間で 4 人ずつのグループで順番に紹介して相互に質問と回答を進める。秋学期には、応答練習のあと PowerPoint を使って応答練習でのやり取りを思い出しながらその日の話題について短い発表用のスライドを作成し、4 人ずつのグループで発表して質疑応答を行うことを通じて、応答練習と合わせて文章作成に先立つウォームアップ練習としている。

### 3. 『自律的相互学習』への助走

新年度の授業開始直後は授業準備と授業中の支援で忙しい。4月のうちはコンピュータやビデオカメラの使い方も含めて授業の進め方になじめない受講生が多く、教室の中を走り回りながら作業の進め方を説明し、機械の使い方を支援する必要がある。授業の進め方も不十分なため、担当教員も受講生も気持ちの上で余裕がないが、6月ぐらいになると学生も何をすべきか授業の流れが把握できるので、少しは余裕が出てくる。

大部分の学生は、学年はじめの授業でクラスメートに自分を紹介することを主な目的とした応答練習のあと自己紹介の英文を50分程度で行おうとしたとき、1文か2文を書く程度で終わってしまう。近年では、大学入試に向けてパラグラフ・ライティングや5段落エッセーの基本的構成について学んでくる学生も多いため、30分という時間で50語から100語近く書ける新入生も増えている。英語圏で高校を過ごしたものは200語程度書けるのが通例であるが、こうした学生はまだどちらかという例外的である。こうした状況の一つの理由は、コンピュータ教室でワープロソフトを用いてキーボードから英文を入力しているため、中学・高校・予備校の英語学習で紙と鉛筆で英文を書いた経験しかない受講生にとっては、英語をキーボードから直接入力することが容易でないという側面がある。とはいえ、コンピュータの利用やタイピングが最大の問題点ではない。学生の様子を見ていると、少し書いては消し、少し書いては消し、2文ぐらいになると全部消してからまた書き直す、というようなためらいと試行錯誤から抜けられない場合が圧倒的に多い。

毎回の授業で文章作成と相互チェックを繰り返すことで、大部分の受講生は限られた時間であっても、春学期の終わりには300語、学年の終わりには400語程度の文章を書くことができるようになる。応答練習についても、4月の授業では質問が聞き取れず、あるいは聞き取れても何を答えてよいか思いつかず、思いついてもそれを英語で口にできず押し黙っている学生が多いが、毎週の授業で一人3問から4問程度の質問に口頭で回答する練習を続けることで、英語の質問に対して1分近く英語での回答を続けられるようになる。

### 4. 『教室における学習資源』としての『隣の受講生』

受講生をグループでの自律的学相互習活動に組み入れて授業を実施していく中で担当教員だけでなく受講生自身にとって明らかになってきたことの一つが、学習資源としての他の受講生の存在意義である。英語学習が必ずしも好きではなく、大学に入ってもうこれ以上勉強しなくてもよくなったと思っている受講生たちが、1時間から8時間もかけて作文を仕上げてくる最大の理由は、担当教員ではなく他の受講生（のうち少なくとも5名が）自分の書いてきた作文を読むということを予期しているからである。応答練習でカードに印刷された英語の質問を読み上げるとき、始めのうちは棒読みしていた学生も、そのうちどのように読むと相手にとって聞き取りやすく、答えやすくなるか考えるようになる。質問に答えるときも、どのような話題について話をするグループの中の他の二人に面白がってもらえるか考えながら話すようになる。

この授業が結果的にうまくいっている理由はさまざまにあるが、文章作成にあたっては読み手を提供し、応答練習に当たっては聞き手を提供することができたことが最大の理由であろうと考えている。通例であれば英語運用力の大きく異なる他の受講生とのグループ作業に大きな不満を抱きかねない進んだ習熟度の受講生も、座席配置（とそれに伴ってのグループの組み合わせ）が毎回異なることから、さほどの不満を持たずに一年の授業を終了する模様である。毎回の授業で学習記録の整理に表計算、文章作成にワープロ、発表用にプレゼンテーションソフトなど、コンピュータを筆記具として活用するため、英語の運用能力が高くなくてもコンピュータの利用法に秀でている受講生の活躍する場面が生じることも一つの要因かもしれない。

### 5. 参考文献

- (1) 原田康也, 「自律的学習を促す学習者主体の英語学習環境をめざして」, 人文論集, No. 47, pp. 61-84, ISSN 0441-4225, 早稲田大学法学会, 2009年2月20日.
- (2) 原田康也, 「コラム:基礎体力増強のための『サーキット・トレーニング』」, 英語教育 2008年10月号, 第57巻, 第7号, pp. 22-23, 株式会社大修館書店, 2008年10月1日.